

大清帝国の形成と八旗制

杉山 清彦

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 准教授

緒言

大清帝国とは、マンジュ（Manju 満洲）人と呼ばれる人びとが17世紀にマンチュリア（満洲）に建国し、18世紀にかけてユーラシア東方で大発展を遂げた、「大清＝ダイチン Daicing」を号する帝国の謂である。1750年代に最大に達したその版図は、王朝興起の地マンチュリアから旧明領の漢地、さらにモンゴル・チベット・東トルキスタンへと広がるに至り、その300年にわたる支配は、現在に至るまでのユーラシア東方の国家や民族のまとまりの原型を形づくった（図1）。世界史上におけるその重要性は、言を俟たないであろう。

その軍事的拡大と統治・運営において中心的役割を果たしたのが、軍事組織であると同時に、帝国形成期においては国家組織そのものでもあった八旗制である。本研究は、16世紀後半から入関（1644年の北京入城）までの国家形成期を主な対象として、(1) 帝国の形成・発展過

程とその構造を八旗制に即して解明し、(2) 興起の歴史的背景を闡明することに取り組んだものである。

大清帝国形成史と八旗制の概況

大清帝国建設の中核となったのは、ツングース系民族のマンジュ人である（当初はジュシェン〈Jušen 女真〉と呼ばれた）。彼らは、15、16世紀にあっては明の間接支配下で大小の領主たちが割拠・抗争していたが、その中から擡頭したヌルハチ（1559～1626）が一代で統合を果し、ハン位に即いた。ヌルハチは、統一過程で傘下に従えた諸勢力を八旗制の下に組織し、その軍事力を背景に對明戦争を開始した。後を継いだ第2代ホンタイジは、民族名をマンジュと改めるとともに、1636年に皇帝位に即いて国号を大清と定めた。さらに1644年に明が内乱で自滅すると、第3代順治帝は北京に進出し、その子の康熙帝が、1680年代までに旧明領の平定を達成

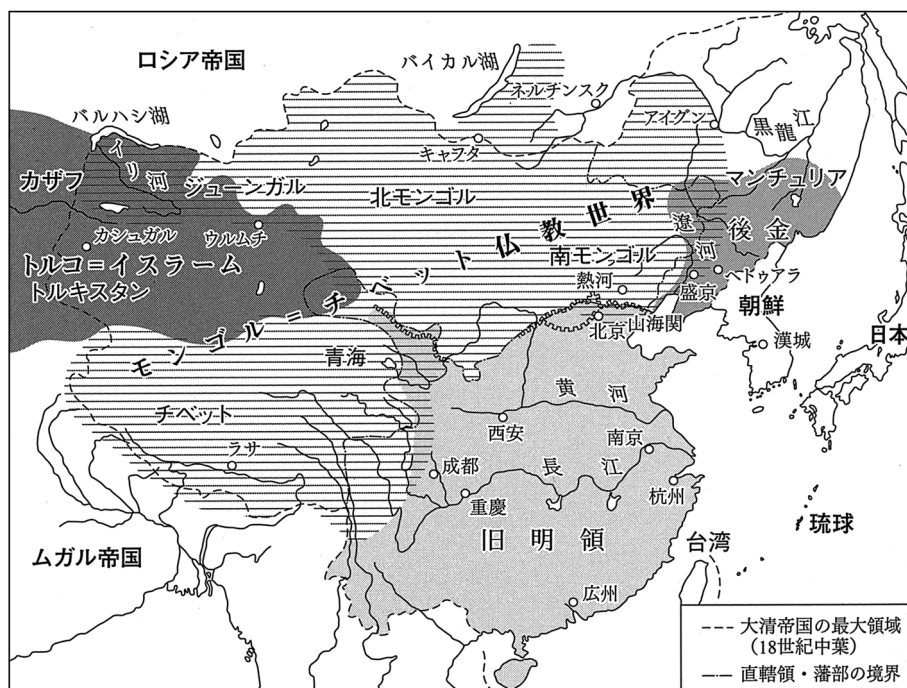


図1 大清帝国の支配領域とその構成 [杉山 2015, p.ix]

した。その後支配領域は南北（内外）モンゴル・チベットへも広がり、第6代乾隆帝^{けんりんのう}の代に至って、東トルキスタン^{トルキスタンの東部}を制圧して最大領域に達したのである。

この国家は、ふつう「最後の中華王朝・清朝」として中国史上の一王朝とみなされ、他方、マンジュ人王朝としての側面に注目する場合は、民族史ないし地域史として自己完結的に捉えられることがほとんどだった。これに対し本研究は、アプリアに中国王朝とみなすのではなく、またマンジュの特殊性のみを強調するのではなく、モンゴル帝国に代表される中央ユーラシア世界の観点と、16～17世紀を焦点とする近世世界の観点とからこの帝国の形成過程とその構造を考察し、位置づけを与えようとしたものである。

そこにおいて注目するのが、独特の軍事＝行政制度として知られる八旗制である。八旗とは、グサと呼ばれる集団八つで構成された軍事・行政一体の組織である。基本単位はニルと呼ばれる組織で、兵役・労役などに従事する成年男子200～300人を出す集団であり、当初は約25～30ニルでグサ、すなわち旗を構成した。これら八つの旗は、ハン＝皇帝が一元的に掌握していたのではなく、それぞれの旗には王族（旗王）が分封され、旗下のニルを支配していた。ハン＝皇帝は入関前には二旗、順治以降は三旗（上三旗^{じょうさんき}という）を直率したが、それ以外の五旗は旗王諸家が分有し続けた。そして入関前国家の全構成員は、原則として八旗に分属して各旗王に支配されていたので、入関前においては、八旗は国家そのものにほかならなかった。大清帝国形成史を論ずるに当り、八旗制がその焦点となる所以である。

清初八旗の形成と構造

入関前の国家が八旗制のもとに編成されていたのであるならば、八旗の組織とその構造とは、大清帝国原初の国制とその内実にはほかならない。そこで本研究では、形成期の八旗の組織構成とその特質を実証的に検証することを通して、帝国形成期の国家構造を闡明した。

そのために取り上げた論点は、次の3つである。まず、ジュシェン＝マンジュ諸勢力を統合したのがヌルハチ政権であり、その組織形態が八旗であるのならば、在来の諸勢力は八旗の中にかなる形で組み込まれ、どのように位置づけられていたであろうか。これが第一の論点である。そこで入関前の八旗各旗の歴代軍団長、高位の位階授爵者、各省庁トップの出自・経歴を復元・分析したところ、その大半が明代に溯るマンジュ有力氏族諸

家の出身であり、官爵を事実上世襲したりヌルハチ一門と通婚するなど厚遇されていたことが明らかになった。彼らマンジュ有力諸家系は、八旗の基本組織であるニルに編成されたうえで、高い位階や官職を占有し、後代に至るまで政権上層を占め続けていたのである。

ひるがえって、ハン・旗王が八旗を分領するという支配構造の面からみるならば、それぞれの旗の陣容がどのようなものであったか、各旗王と旗人の間にはいかなる関係があったか（あるいは、なかったか）という問題が浮上する。これが第二の論点である。そこで次に、視点を八旗各旗の側に移し、八旗各旗における旗王への属分与のあり方を検討し、旗王-旗人関係の原則、ひいては旗の編成・運用の原理を考察した。その結果、領旗分封とは、ヌルハチ一門のうち、各旗上層部を構成する有力氏族諸家との有縁者が、同母兄弟ごとに授封されたものであったことが判明した。すなわち八旗制とは、官僚制的・非人格的な編成・運営を第一義とした組織というよりも、主従・姻縁・地縁など属人的関係を組織原理としたものだったのである。

さらに第三点として、八旗の並列構造から眼を転じて上下の求心構造、すなわちハン・旗王の身辺に仕える人びとに注目し、ヒヤと呼ばれる親衛集団について実証的に検討した。その結果、ハンと諸旗王が各自保有する親衛隊は、それぞれの警護・側近・精鋭部隊を兼ねるとともに各旗首脳・中央政府をも構成する集団であり、その本質が、隊員へのリクルートを通して、あらゆる成員をハン・諸王の家産的支配・主従関係へ包摂していくという機能にあったことを明らかにした。

以上から政権の本質を約言するならば、それは門地・功績に基盤を置く諸氏族が、帝室アイシン＝ギョロ（Aisin Gioro 愛新覚羅）氏を君主に戴いて各旗に分属し、重要な地位・職掌を分有して支配層を構成した連合政権であり、その連合形態こそ八旗制であった、ということが出来る。そこにおいては、整然と左右翼に分れた八旗各旗をヌルハチ一門が旗王として支配するという一族分封・共同領有の原理が貫徹しており、ハンは、このような並列体制下で序列・勢力ともに首位に立つ存在として全体に君臨していた（図2）。

このように要約するとき、階層的組織体系・親衛隊制度・一族分封・左右両翼体制などで特色づけられる八旗制とは、モンゴル帝国に代表される中央ユーラシア国家の伝統的組織法（図3）にはほかならないことが明瞭に看取される。すなわちマンチュリアに登場した大清帝国

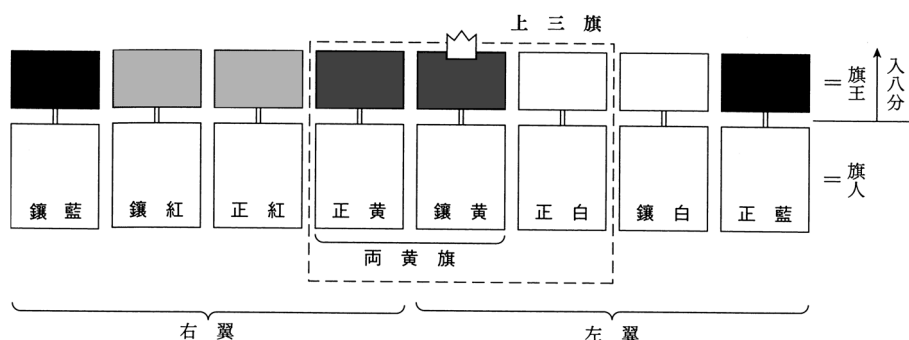


図2 八旗の序列と左右翼体制 [杉山 2015, p. 264]

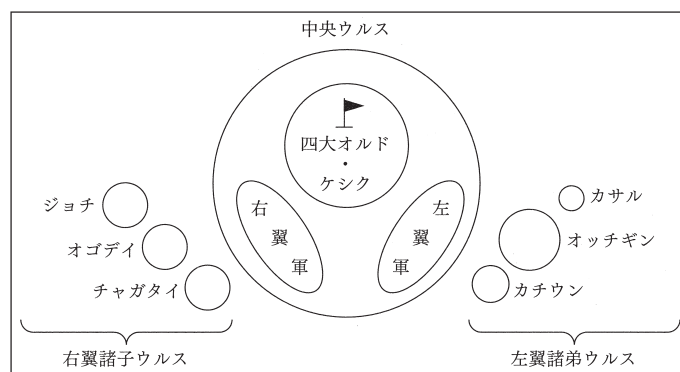


図3 モンゴル帝国の中核構造 [杉山 2015, p. 295]

は、支配集団自身は遊牧民ではなくとも、まさしく中央ユーラシア国家の系譜上に明確な位置を占める帝国だったということができるのである。

「近世」世界のなかの大清帝国

他方、帝国の興起・発展を可能ならしめた時代状況と、その中でマンジュ国家の成功の要因とは、いかに説明されるであろうか。近二十年来、大清帝国の勃興・拡大期である16～17世紀、とりわけその世紀転換期は、中国史をはじめ日本史・西洋史の各分野において、アジア大・世界大の政治・経済・社会にわたる秩序の変動・再編成の時期として注目が集まっている。また実際、一地域の軍事的覇権を握っただけでは、地域国家を超えて一大帝国に成長することはできないであろう。

そこで大清帝国の形成と16～17世紀のユーラシア東方情勢との関わりについて見渡すならば、この時期、明の周縁地帯において、国際貿易の隆盛とその利をめぐる競合・衝突の激化、そしてその下での諸民族の混淆という状況が広く見られたことが、日本史・中国史などさまざまな分野から指摘されている。この「華夷雑居」と呼ばれる諸民族混住・雑居とその下での秩序の流動化とい

う状況に対し、マンジュの大清帝国がいかに対応したかを検討すると、出自・来歴を問わず、政権への参加者を八旗制下に編入・組織して戦力化していったことが明らかになる。これを、ここでは「マンジュ化」と呼んだ。これは「華夷雑居」へのマンジュ的対応であるが、その淵源は、同時代の他地域よりむしろ、モンゴル帝国をはじめとする中央ユーラシア国家の支配様式に求められるものといえる。

大清帝国形成の歴史的 position

以上のように、本研究においては、第一の柱である八旗を核とした帝国形成の過程とその構造について、著名でありながら組織体系以外ほとんど解明されていなかった八旗制の構造を実証的に明らかにするとともに、その形成・整備過程を歴史的背景にまで溯って解明した。さらにそれを通して、八旗を国制とするマンジュの大清帝国が本来中央ユーラシア国家として位置づけられるものであり、中央ユーラシアの軍政一致組織の系譜の中で、そのマンジュ的形態たる八旗制とは、最も求心的・集約的な形態であったと結論した。また第二の柱として、同時代状況と帝国興起の関わりについて考察し、大清帝国

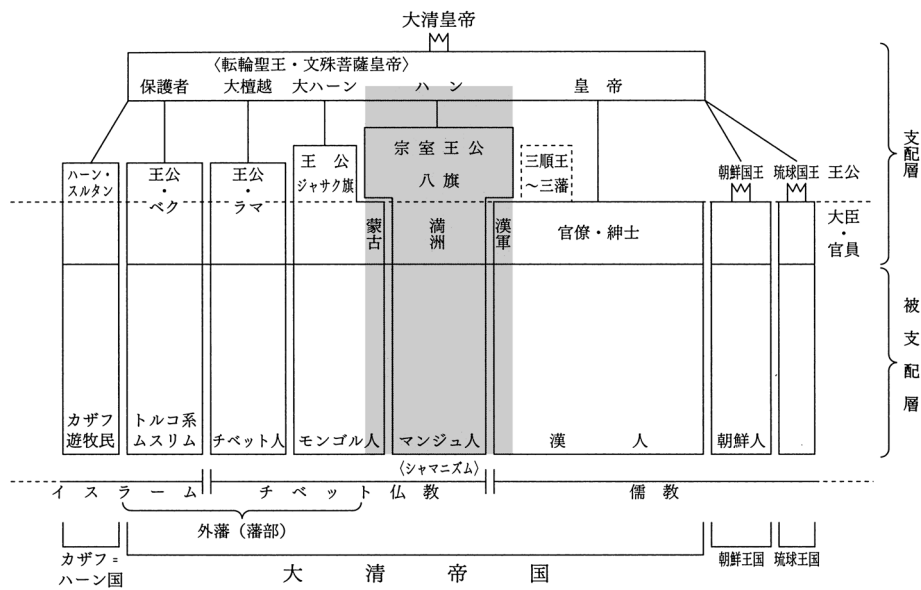


図4 大清帝国の支配構造 [杉山 2015, p. 403]

形成・発展の要因は、16～17世紀ユーラシア東方世界の諸民族雑居・社会変動という同時代の情勢に対し、八旗制を核として柔軟に対応・編成していったことにあると指摘した。そしてこのようにして組み上げられた帝国は、マンジュ人皇帝が、支配下の諸地域・諸民族に対してさまざまな位置づけを以て君臨することで統合されており、その下で八旗が手足となって統治・運営を担った(図4)。

以上が本研究において主張するところの大清帝国形成史の枠組みであり、また広域・多民族統治の構造の説明である。そしてこの成果は、中国史・清朝史の見直しにとどまらず、先行するモンゴル帝国はじめとする中央ユーラシア史、並行するオスマン帝国史などイスラーム

諸国家史、さらには日本中近世・ヨーロッパ中近世の国制史にも大きく裨益するものである。大清帝国史の可能性は、あらゆる方向に開かれているのである。

謝 辞

このたびは歴史ある公益財団法人三島海雲記念財団より第5回三島海雲学術賞を授けられ、過分の光栄と、心より感謝申し上げます。理事長はじめ財団関係者の皆さま、選考委員の先生方、また本賞にご推薦いただいた内陸アジア史学会と研究をまとめる機会を与えてくださった名古屋大学出版会の皆さまに対し、深甚の謝意を表します。